

共生と平和の科学

『子どもの人権』『環境』『ジェンダー』を軸に共生と平和を考える

— 3つの軸の広がり結びつきを意識した2年目の実践 —

原 順子・高橋 伸行
三小田博昭・高井 次郎*

【抄録】 「共生と平和の科学」2年目の取り組みは、初年度の成果と課題を踏まえて次の2点を改めた。1点目は3つの軸を高校生が考えやすいようにより具体的にしたこと。2点目は、それぞれで異なっていた授業の流れを、合同授業を軸の要にして同様に組み立て、3つを結びつけて共通性を導きやすくしたこと、である。全16回の授業の流れと各授業のねらいを中心に、2年目の実践を報告する。

【キーワード】 新教科 共生 平和 子どもの人権 児童労働 自然破壊 環境問題 ジェンダー 男女平等

1. はじめに

昨年、我々は新教科の中で、共生と平和という大きなテーマを「貧しさと豊かさ」「ヒトと人」「女と男」の3つの方向から系統的に見ていく授業実践を行った。実践を行って得た成果は、個々のテーマは現代社会が直面している重要な問題であると、生徒に学ぶ意義を感じさせることができたこと。課題は3つの軸から、共生と平和の原理を導き出すことが十分でなかったこと、である。

そこで本年度は次の2点を改めた。1点目は、昨年の「貧しさと豊かさ」を政治・経済・社会という漠然としたものから、子どもに焦点を絞って「子どもの人権」に、「ヒトと人」をより他の軸とリンクしやすいように「ヒトと地球」とした。2点目は全16回の授業のプログラムを、[導入→展開①→展開②→まとめ]と、4つのまとまりで組み立て、合同授業を軸の要にして、3つの軸を結びつけやすいように工夫した。

2. 講座の目標

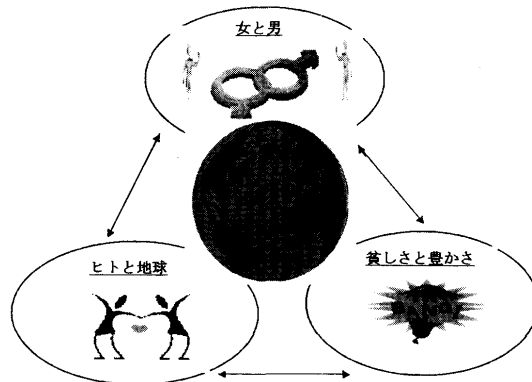
地球における社会にはさまざまな集団が存在し、それぞれが独特であり、その特異性が集団間の葛藤を生む。文化に優劣はなく、また一つの文化が唯一正しいということもないが、世界各地で文化の衝突が起きている。異文化または異集団の特異性がお互いに理解できれば、その正当性に納得ができ、相互に尊重しあう関係が生まれる。この授業では科学的な観点からこうした集団が共生共存できる可能性を探る。地球市民として、「人類」という共通の集団に属していることを忘れてはいけない。

(高井先生ガイダンスより)

- 1) 地球上の様々な集団が互いに認め合い、平和に共生共存できる可能性を探ることができる。
- 2) 同じ時代を生きる身近な人々や地球上の遠く離れた人々の生活に関心を持つことができる。
- 3) 共生社会の実現のために自分たちに何ができるかを考えて行動することができる。

3. 講座設定の背景

近年、地球規模の自然環境破壊や、南北格差など集団間の諸問題は、大きな社会問題になっている。関連するこの2つの問題の現状を把握し、よりよくするためにできることを考えていくと、「共生」という共通の原理が見えてくる。共生とは「分かち合い」である。そこから「平和」の概念を導くこともできる。そこで、この問題を生徒が自分たちの課題として捉えるために、新教科群の中に「共生と平和の科学」を立ち上げた。『子どもの人権』『環境』『ジェンダー』の3つは、共生社会の実現には欠かせないテーマであるとともに、対象が具体的でわかりやすく、かつ、互いに結びついているテーマであるため選んだ。単独で、あるいは合同で学び合うことにより、考えを深め、共有し、問題を多面的な視点から探求し、分かち合う責任や幸せを気づかせたい。



*名古屋大学大学院教育発達科学研究科助教授

4. 授業の流れと指導内容

担当	三小田 (英語科)		高橋 (理科)	原 (家庭科)
テーマ	『子どもの人権』 —豊かさと貧しさ—		『環境』 —ヒトと地球—	『ジェンダー』 —女と男—
回	月/日			
導 入				
1	10/14	高井先生「共生と平和について」 テーマガイダンスⅠ「セックスとジェンダー」(原)		
2	10/21	テーマガイダンスⅡ「100人の村／バングラデッシュ」(三小田) 「小さな地球」(高橋) グループ希望調査		
3	10/28	写真からみる子どもの生活 (フォトランゲージ) 日本と他の国の比較	自然の姿：熱帯雨林	ジェンダーを見つけよう① 「らしさ」と「好ましさ」
展 開 ①				
4	11/4	子どもの権利条約① ・欲しいもの必要なもの ・映画「神の子」	実習 ・ザルツマン試薬によるNOX検出／マツの葉を用いた粉塵調査	ジェンダーを見つけよう② 「女」「男」の入っている言葉を辞書で探そう
5	11/18	子どもの権利条約② ・子どもの権利条約に関するランキング	市岡先生 (本学農学部) 「ボルネオの熱帯雨林における生物学調査」	ジェンダーを見つけよう③ 発表討論会
6	11/25	モンゴル留学生を招いて 「モンゴル社会と子どもたち」 【ジェンダーと合同授業】	武田先生 (本学工学部) 「環境を守る」とは何か	世界の中のジェンダー① 「モンゴル社会と子どもたち」 【子どもの人権と合同授業】
7	12/9	高井先生 「ODAとWHOへの貢献」	「ケナフは地球を救う？」	メディアとジェンダー① 新聞・雑誌が発するもの 「メディアリテラシー」
8	12/16	3グループ合同 中間発表会		
展 開 ②				
9	1/20	パーム椰子の話 パーム椰子ワークショップ 【環境と合同授業】	パーム椰子の話 パーム椰子ワークショップ 【子どもの人権と合同授業】	メディアとジェンダー② 高井先生「USAメディア」 冬休み課題(リテラシーTV・映画編)発表討論会
10	1/27	プランテーションにおける児童労働	♂と♀の生物学	高井先生 「文化と性役割観」
11	2/3	途上国の子どもの識字率 ・非識字体験 ・ウェビング	TTSの会主宰松尾さん 「バイアスのない社会を」 【ジェンダーと合同授業】	TTSの会主宰松尾さん 「バイアスのない社会を」 【環境と合同授業】
12	2/10	私たちにできること 「ランキング」	環境問題は自然科学？	世界の中のジェンダー② ノルウェーの「男女平等の教科書」を見る
ま と め				
13	2/13	3グループ合同 共生と平和の鎖①—負の連鎖—		
14	2/17	3グループ合同 共生と平和の鎖②—私たちがしていくこと—		
15	3/9	3グループ合同 学んだことを集録にまとめる		
16	3/16	3グループ合同 集録づくり アンケート まとめ		

5. 導入の授業展開例

1) 『子どもの人権』

展開例 第3回授業

写真からみる子どもの生活 —フォトランゲージ—

(1)ねらいと留意点

日本国内で日々満ち足りた高校生活を送っている生徒たちに、今後授業を進めていく中で、なぜ今さら「子どもの人権」テーマにして取り上げるのかを、ガイダンスに続き再確認をさせ、学習の目的・目標を個々の生徒が持って授業に取り組めることをねらいとした。

(2)準備するもの

◎大きく拡大した途上国の子どもを中心とした写真（グループの数だけ準備する。ここでは4枚）

アフガニスタン

バングラデッシュ

パキスタン

日本（昭和20年代）

◎黒板に写真を貼るためのマグネット

◎ワークシート（各グループ1枚）

(3)展開

- ①クラスを4～5人のグループに分ける。
- ②黒板にグループの数だけの写真を貼る。
- ③写真を各グループに割り当て、どこの地域・国か、子どもたちは何をしているのか、年齢は等について写真から読み取らせる。
- ④写真から見える「貧しさ」と「豊かさ」についてグループ内で考える。
- ⑤発表する。
- ⑥18才までの子どもにとって大切だと思うことを個人単位で自由に振り返りシートに書かせる。
- ⑦振り返りシートに書いたものの中で最初に黒板に貼った国の写真の中でその国の子どもたちが持っていると感じたものに丸をつけさせる。

(4)生徒の反応

—（振り返りシートより質問）—

子ども（～18才）にとって大切だとあなたが思うものを自由に書いてください。

（生徒の答え）

・勉強・スポーツ・自由・遊び・お金・健康・親・安全・服・食事・愛・住居・衛生・夢・友達・家・平和・学校・水・・・

注）□囲みは写真の中の子どもたちが持っていると感じたもの。

2) 『環境』

展開例 第3回・第5回授業

自然の姿「熱帯雨林」—ビデオ&講師による講義—

(1)ねらいと留意点

環境問題を考えるとっかかりとして、ヒトの手の入っていない自然の姿、生態系内の仕組みを知ることをめざした。

(2)教材及び講師

◎「緑の秘境・林冠～地上35mの熱帯雨林」（NHKスペシャル93年放映）

・市岡孝朗先生（本学農学部助手：当時。現京都大学）による講義。

(3)展開

第3回

実際に赴くことがかなわないため、視聴覚教材での学習。自然の巧妙な仕組み、微妙なバランスの上に共生しあう生き物たちなどの貴重な映像が多く収録されている。

第5回

実際にボルネオを研究のフィールドにしておられる市岡先生に講義をお願いした。「熱帯雨林を守る」という話ではなく、今後の展開の基礎となる回という認識から、あえて生態学の講義をお願いした。

「熱帯雨林には何故こんなに多くの生物が共存できるのか」「人間にとってどのような役割をはたしてくれるのか」など未知の魅力に満ちていることを伝えていただけた。

(4)生徒の反応

言葉で聞き、本で目にしていた熱帯雨林というものについて、より具体的なイメージがわき、その生物同士の不思議なつながりとそのあやうさを実感したようである。熱帯雨林が消えるということが何を意味するか、ひいては地球環境を変えることが何をもたらすかを考えていく手掛かりになった事と思われる。

3) 『ジェンダー』

展開例 第3回授業

「好ましさとジェンダー」 —ワークシート—

(1)ねらいと留意点

私たちが日常の生活の中で、つい思ってしまう「女のくせに」「男のくせに」。裏返すとそれは、好ましさに性差があることを意味する。女としての好ましさと、男としての好ましさと、人としての好ましさにどのような違いがあるか考え、自分たちの中にあるジェンダー意識を見

つける。

本授業はジェンダーを選択した生徒たちが、初めて受ける授業である。生徒の選択の動機は、第1回目のセックスとジェンダーのマッピングに興味を持った、というのが多い。(他の2つは難しそう、を選択の理由にあげる生徒もいる。)セックスとジェンダーについて確認してから始めるとよい。

(2)準備するもの

- ◎ワークシート人数分
- ◎模造紙2～3人に1枚当たる枚数
- ◎赤黒2色のマーカー人数分

(3)展開

- ①ワークシートを配布し、前の時間で話し合ったセックスとジェンダーについての自分なりの解釈を書く。
- ②日常生活の中でふと思ってしまう「女のくせに」「男のくせに」をシートに書く。
- ③…のくせに、を裏返し、「女は〇〇がよい」「男は〇〇がよい」と自分(社会が)が考えている好ましさを書く。
- ④なぜ好ましいと感じるのか、セックスとジェンダー、どちらに起因するか考え記入する。
- ⑤2～3人のグループをつくり、お互いにシートを見せ合い、意見交換をする。
- ⑥グループで次のことを話し合わせ、模造紙1枚にまとめる。

〈まとめるポイント〉

- ・好ましさに性差はあるか。それはセックスかジェンダーか。
- ・人としての好ましさと性差で求める好ましさは同じか。
- ・同姓・異性どちらの「…くせに」が見つけやすいか。なぜか。
- ・この授業の感想

- ⑦まとめた模造紙を発表し、クラスで意見交換をする。

(4)生徒の反応(感想から)

●例：男のくせに髪が長い→男は髪が短い方がよい→(男を人に置き換えると…)→人は髪が短い方がよい！⇒だんだんおかしくなってくる。この原因として固定観念があげられる。私が生まれてからスカートをはいているのは女しかいなかった。だから「女だけがスカートをはく」という固定観念が生まれてしまったのだ。きっと男もスカートをはきだせば、始めは(固定観念があるので)衝撃的だが時が経つにつれて当たり前になり「男も女もスカートをはく」という新しい固定観念が生まれるだろう。

●男のくせに～だ、女のくせに～だ、などといわれるこ

とは往々にしてあるが、それがセックスによるものか、ジェンダーかを考えた。

- 例：・男のくせにすぐ泣く。
- ・女のくせに料理ができない。

前者は人として好ましくないものを男に求めている例であり、後者は人として好ましいことを女に求めている例である。人として好ましい(または好ましくない)ものをどちらか一方の性にだけ求めている。

●「女は～である」「男は～である」というのを出したとき、ほとんどジェンダーのものが出た。もう私の意識の中にはジェンダーが当たり前になっているのかな。

6. 展開①の授業展開例

1) 第6回授業

『子どもの人権』『ジェンダー』合同授業
モンゴル留学生「アジアの子どもたち」

—ゲストティーチャー—

(1)ねらいと留意点

『子どもの人権』と『ジェンダー』との合同授業である。『子どもの人権』『ジェンダー』の授業の中で高校生が日頃の生活の中でとても身近な自分たちに大きくかわわっていながらも、あまり気に留める機会が多くない自分たちの人権やジェンダーについて学習を行ってきた。

この合同授業では日本以外の国の様子についてモンゴルからゲストティーチャーを招き、モンゴルという国の実情を踏まえながらモンゴルにおける『子どもの人権』と『ジェンダー』について話を聞いた。この話の中で、『子どもの人権』『ジェンダー』は日本国内だけでなく世界的な社会環境問題の1つであることを子どもたちが認識することをねらいとする。モンゴルは社会主義国から自由主義国へと国のシステムが変更したことにより、多くのストリートチルドレンが現在首都ウランバートルに多く存在する。また国の事情から多くの女性の社会進出が日本よりも進んでいると聞く。そのような背景から、今回同アジアの国の1つとしてモンゴルからゲストティーチャーを招いた。

・ゲストティーチャー

モンゴル ウランバートル出身 男性

現在 名古屋大学大学院環境学研究所属

(2)準備するもの

- ◎パソコン プロジェクター等発表機器
- ◎各種地図(世界地図 モンゴルの地図)
- ◎ワークシート

(3)展開

- ①ゲストティーチャー紹介
- ②生徒がもつモンゴルのイメージを自由討論
- ③モンゴル ウランバートルの様子をプロジェクターを使いながら生徒に説明
- ④質疑応答
- ⑤写真撮影



(4)生徒の反応 (感想から)

●私は中学の頃、生徒会で海外援助物資活動を行ったことがある。義援金、古着、勉強道具等をモンゴル、フィリピン、ベトナムなどの子どもたちに。その際マンホールチルドレンについて少し学習したことがあるが、彼らの生活状況は悲惨なものだった。(中略) 今日モンゴルの話を聞いて都市と田舎、そして自由主義になったことで起こる問題。貧富の差がものすごくあることがわかった。まだまだ国内外から多くの援助が必要であると思う。

●(前略)そしてモンゴルの人から見ると、日本はお金もちだと思われていることにも驚いた。よく日本は豊かな国だと言われるけれど、実際はそうでもないし、「豊か」と言い切ることはできまいと思う。日本とモンゴルで共通だと感じたのは、現代は女性が多く活躍することが多いということだ。いつか明治時代や昭和時代の正反対(女性の地位が上で男性の地位が下)になる日が来るのではないかと思った。モンゴルの男の人にももっとがんばってもらって男女平等のままでいて欲しいと思った。

●話を聞き終えてモンゴルという国のイメージが自分の思っていたものかなり違うということにびっくりしました。「広い土地にどこまでも続く草原、伝統音楽を楽しみ馬に乗る」というものでしたが実際差真などを見せてもらって自分の中のイメージがとてもかわりました。田舎に行く学校に通うことができる子どもが2割という数字にも驚きました。日本では希望すれば誰でも教育が受けれるという環境をあたりまえだと思ってはいけなさと感じました。



2)『環境』

展開例 第6回授業

「環境を守る」とは何か —講師による講義—

(1)ねらいと留意点

通常のいわゆる「環境教育」をなぞるだけでは意味がないと考え、環境問題に関して定説、常識とされていることを、今一度冷静に考え直してみる。いわゆる環境問題とされている事柄に関して、研究者の間でも見解の相違があり、何が「正しい」のか一概には決めつけられないし、情緒的に「地球にやさしく」行動することに意味がなかったり、意図とは別の結果を招いてしまうことすらあることを学ぶ。

(2)特別講師

本学工学部教授の武田邦彦先生に講義をお願いした。先生は「エコロジー幻想」(青春出版社)などの著書もありで、環境問題の常識とされていることがらを今一度冷静に吟味しようというお立場からの発言で知られる。

(3)展開

(1)紙のリサイクルは環境を改善するか?

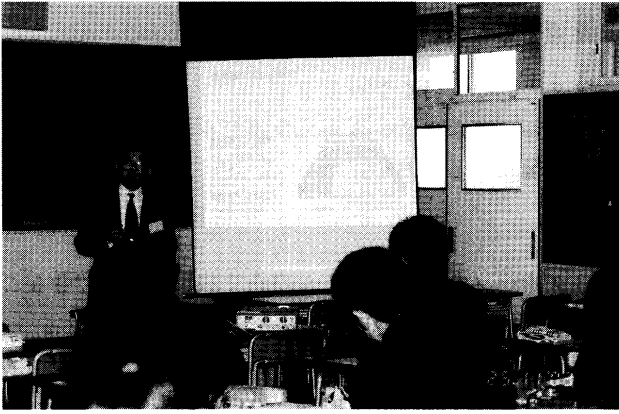
(2)地球温暖化は環境問題か?

という2つのテーマを例に興味深い講義をしていただいた。

具体的な分析例を挙げたのち、先生は①事実をしっかりと見る。②自分で考える。③総合的に考える。という3つの視点を身につけて欲しいと結ばれた。

(4)生徒の反応 (感想から)

●今までいいと思って実行してきたことは実際に自分自身で調べ上げたことから行動にうつしているのではなく、テレビや新聞などのメディアから得た情報だけをもとに行動してきたものだった。



3) 『ジェンダー』

展開例 第7・9回授業

「ジェンダーを再生産するものは何か」—ワーク—

(1)ねらいと留意点

メディアはどのようにして私たちにジェンダー意識を刷り込んでいくのか。新聞、雑誌マンガ、本のなかから探して模造紙に貼る。冬休みの課題としてTV、映画、町中などから見つけ、休み明けに発表する。探すものは「男女男女どちらかにしかない表現」、「性別ステレオタイプを強調する表現」、「性別役割を固定する表現」、「性を商品化する表現」である。するといかにジェンダーの固定観念は「つくられたもの」であるかがわかる。

この授業で気をつけることは、生徒が現在持っている価値観を否定しないことである。

自己否定するためにリテラシーをするのではない。そのためには探すものの定義をしておく必要がある。「つくられたもの」だから悪いのではなく、「変えたい人が多ければ変わっていくもの」だ、と伝えることが大切である。そのためには、メディアを全て正しいと鵜呑みにしないこと、多くの情報を正しく認識していく意志を持つことである。そうならば自己肯定しながら、考え方の変化に対応できる。

(2)準備するもの

- ◎ワークシート人数分
- ◎新聞、雑誌、マンガ本など (生徒に持ってこさせる)
- ◎模造紙 (2~3人に1/2の大きさ1枚)
- ◎マーカー (予備でのり、はさみ)

・第9回授業では、USAから帰国直後の高井先生が、おみやげに雑誌とビデオを持ってきて下さった。

雑誌「COSMOPOLITAN」(女性誌USA原版)
ビデオ「麻薬密売人おとり捜査で逮捕の瞬間」
(USA版警察密着24時間のようなTV番組)

(3)展開

- ①ワークシートを配布し、自分のジェンダー形成に影響したものを考える。*
- ②メディアが少なからず影響を与えていると自覚した上で、本・雑誌などからジェンダーバイアスの表現を探す。
- ③2~3人で一組になり、見つけたら切り取り、模造紙に貼り付け、コメントを書く。
- ④休み中の課題プリントを受け取る。
- ⑤休み明けに模造紙と課題の発表討論会を行う。

(4)生徒の反応感想

*ジェンダーを再生産するものは何か。生徒に家庭教育、学校教育、メディア、その他の4つで自分のジェンダー形成を10として、影響した割合を聞いた結果
(受講生の平均値)

影響したもの	02度 (21人)	03度 (37人)
家庭教育	2.8	3.3
学校教育	2.6	3.1
メディア	3.9	3.3
その他	0.7	0.3

その他の例：友人 人間関係

●女性雑誌の後ろの方にはダイエットの広告が多いのに対し、男性雑誌には頭がよくなったり、金持ちになれたり、背が伸びる広告が多い。こういうのもジェンダー形成に影響を与えているとわかった。

●これは冬休みの宿題であった。私はTVの「ちびまる子ちゃん」を見ていた。まるちゃんの汚い部屋を見た小さな男の子が「女のくせに片付けくらいしろよ」と言っていたのだ。「女のくせに」これはまさしくジェンダーだ。子ども向け番組でこのような始末だ。一番メディアから影響を受けやすい年代の子どもが、何を考えてこれを見てしまうだろう。たぶん何も考えないで「そうなんだなあ」と思ってしまうだろう。また、思わなくても頭の中でインプットされて、日常で使うようになってしまっているのではないか。身近にあるメディアがこのようではジェンダーが消えない、消せないのは当たり前である。

●女性誌「MORE」に男性が求める女性についての特集があった。その特集は20代男性のアンケートにより成り立っており、節々に男性の女性に対する固定観念がうかがえる。

まず、妻にしたい女性の条件は

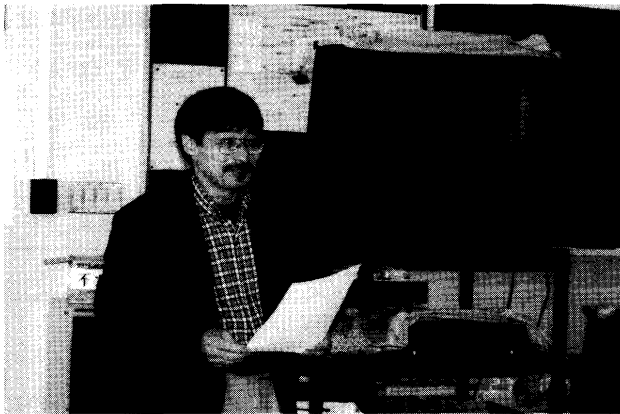
- ・髪は黒からおとなしめの茶・ひざ丈スカートを愛用
- ・趣味は料理・カラオケではELT、aikō

などがあげられる。この条件から考えるに男性はひかえめで出しゃばらない女性を妻に求めているようだ。

反対に愛人にしたい女性は、顔がよくてスタイルもいい、と、とにかく外見重視だ。外見や体にしか価値がない、というような言いぶりである。そもそも“愛人”という存在を求めること自体がおかしいのでは、とも思うのだが。

●冬休みの課題で、メディアの中からジェンダーを固定化させる表現を読みとろう、という課題が出ました。この時、なかなか見つけられずに悩みました。しかし、休み明けにみんなの発表を聞いたとき、そう言われればそうだなあ、とあらためて気づくことがたくさんありました。

●メディアは情報の押し売りではなく、それを見た人、聞いた人に考えさせるような方法で情報を提供していくべきだと思う。それにより他を知り、無知による偏見が減り、共生への一歩になると思う。



4) 合同授業展開例 第8回授業 「中間発表会」 —【3グループ合同】発表会—

(1)ねらいと留意点

3つのグループがこれまで学んできたことを互いに報告し、学び合う。現代社会の別個の問題の中に、共通性はないか、法則性はないか、「共生と平和」をキーワードに『子どもの人権』『環境』『ジェンダー』を考える。生徒一人一人は1つのテーマについてしか学んではいないが、級友が学んで得たことを互いに共有し合う。それを今後のテーマ追求に生かしていく。

各グループとも、この3グループ合同授業の前に、2グループ合同で授業を行っている。しかし、2グループの授業は、共通する題材を教師が選んで共に受ける形態なので、情報交換はこの授業が初めてである。他のグループの情報を得ると共に、人に説明することで、自分の考えたことが整理出来る。

(2)準備するもの

- ◎メモ・感想を書くシート
- ◎各グループから2～3人、合同で6～7人になるように班編成しておく。

(3)展開

- ①3グループ合同の6～7人の班で話し合いができるように向き合って座る。
- ②班の中で各グループが学んできたことを報告する。
[準備(5分)→報告(各5分)→質問(各3分)]
- ③1グループ13分、3グループの報告が終わったら他のグループから学んだこと、3つのテーマの関連性について報告会の感想を書く。

(4)生徒の反応(感想から)

●「ヒトと地球」「女と男」「貧しさと豊かさ」を含めて“共生と平和”について考えましたが、結局共生は難しいと思いました。身の周りを見回してみても、共生ができていない問題は少ないと思います。しかし、共生するためには、いずれの場合でも一方的に文化や伝統や考えを押しつけてはいけません。押しつけない、お互いの文化、意見を協調できる解決策があればいいと思います。

●本当に摩擦のない生活というのは実際には無理である。しかし、いかなる工夫もせず平和だけを唱えていても共生できる平和は生まれてこない。世界中の人々、一人一人がそれぞれの人権を尊重しあって生きていくことが必要だと思う。

●相対するもの同士が共生するためにはどうしたらいいか。それはとても難しいことです。伝統や教育、メディアなど身の回りのものが自然と共生を阻む原因にもなるのです。けれど対立関係を放っておけば、平和な世界は生まれません。私は、あふれる情報を冷静に見極め、相手の立場に立って考えることが共生への第一歩になるのでは、と考えました。

7. 展開②の授業展開例

1)『子どもの人権』『ヒトと地球』合同授業

展開例 第9回授業

パーム椰子の話 —ワークショップ—

(1)ねらいと留意点

ある人間にとって有益なことが、その反対の人間には全く有益でないことは私たちのごく身近な生活にもよく見受けられることである。生活のために働かなければならない子どもたちの活動が環境を知らず知らずのうちに破壊していたり、通説で環境によいと言われていることが、返って環境破壊を大きく促進していることがよくあ

る。この相反する問題を解決していいのは容易なことではない。片方をとればその反対のほうが被害を受ける。逆もまた同じことがいえる。この負の悪循環をどう捕らえ、問題解決にあたるのかを生徒が自分で考え、答えがない問題の解決策を講じる難しさを体験することをねらいとする。また自分の考えとはちがったロール（役割）をこなすことにより、自分のもつ固定観念を違った角度から考え直すことができたり、また逆の立場に立つ人の考えを理解することができるといったあらゆる方向から1つの問題について討論できることもねらいの1つとなる。

(2)参考教材

・パーム油の話

「地球にやさし」って何だろう？

教材Ⅱ サワラクの森の恵

開発教育協議会

・課題内容の概要

サワラク州A地区の森林でパームヤシ農園の開発が先進国の手によって行われようとしている。この議題に関してA地区の先住民、農園開発企業、NGO等が話し合いの場を設け、議論する設定である。

(3)展開

- ①パーム油についての基本的知識の説明。
- ②ロールプレイについての説明。
- ③グループ内で自分のロール(役割)についての発表し、他の生徒のロールを理解する。
- ④グループ内でのディスカッション。
- ⑤ワークシートの記入。

(4)生徒の反応

開発に賛成の生徒の意見

●暮らしをよくするのは当然であるからA地区の開発には賛成。環境問題は仕方ないと考えるしかないのかもしれない。現実に環境問題を叫ぶ人々は先進国の人であり、それを発展途上国に要求するのはいかなるものか。それならそのように要求する人たちは先進国を出るべきだろう。だから開発に賛成だ。しかし、そうは言っても環境問題をどうすればいいのかわからない。

●なんだかんだ言っても先進国に住んでいる私としてはパーム油がないと困るので(家で洗剤として使ったりと必要不可欠なので)開発に賛成です。環境問題とか先住民の問題がどうのと言われてもあまり実感がわかってないというのも賛成の理由の1つですが、事実世界でこのような事が起きているので今後も学びを続けていかなければならないと思いました。

開発に反対の生徒の意見

●できれば、そこにある素晴らしい自然を壊して欲しくない。それに、伝統をとぎれさせたくない。開発することで国が豊かになると言われても、失う物が多い気がする。それにもし事業に失敗したら提供されたすべての事が無駄になってしまう。すべての面からみても大きなリスクがあると思う。

●一時的な経済の循環のために、長い間作り上げてきた自然を破壊することは環境問題が深刻化する今日、実に愚かな事である。しかしおそらく「経済」に対して潤いを与えているのは豊かな我々日本など先進国であり、その日本に暮らす自分がこの問題に対して意見を述べることで自分がエゴイズムなのかもしれない。

2)『環境』

展開例 第12回授業

環境問題は自然科学？

—講義—

(1)ねらいと留意点

環境問題の発生もその解決も、鍵は科学技術の問題だと思われがちであるが、実際には社会科学的(政治・経済)要因も複雑に絡みあっているものだという現実を知る。

(2)教材

ビョルン・ロンボルグ「環境危機をあおってはいけない」(文藝春秋社)

この他に、西川・渡辺「環境ホルモン」、渡辺・林「ダイオキシン」(ともに日本評論社)、安井至「環境問題読み・書き・ソロバン」(文藝春秋01/6号)を参考にした。

(3)展開

以下の項目に沿って授業を展開した。

- (1)先進国・途上国間のエネルギー、食料の偏り
- (2)援助とビジネス
- (3)「定番話」再考

(1)については途上国問題に触れることで『人権』グループとの関連がもてるよう意識した。(3)では、展開①に引き続き環境問題の常識とされていることがらの検証をした。具体的には酸性雨、環境ホルモン、ダイオキシンに関するデータを挙げ、解説をした。

まとめとして

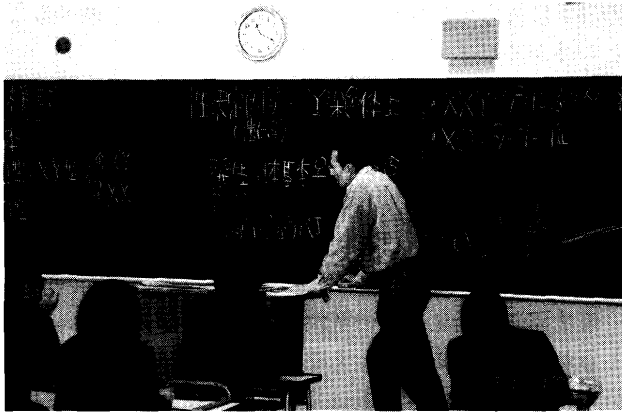
- ①思いこみでなく現実をみる。
- ②以前より良くなったか悪くなったか、データの傾向をきちんと捉える。
- ③センセーショナルな「情報爆撃」により生み出されるおびえにふりまわされない。
- ④改善してきてはいるが、十分ということとはまた別の問題なので、今後とも努力は必要。

であることを強調した。

(4)生徒の反応 (研究収録原稿より)

●この授業を受けて一番強く感じたのは、「視点を変えることの重要性」だ。現代の人間は膨大な情報をもつことになり・・・(中略)・・・その情報には偏りが生じているのではないか。本質を見極める力を磨いていきたい。

●人々が勘違いをしていることも多く、「自分は環境のためにこのような努力をしているんだ」と思っているがこれがさらなる環境破壊を招きかねない。



3)「ジェンダー」

展開例 第12回授業

ノルウェーの「男女平等の教科書」を読む

(1)ねらいと留意点

ノルウェーには「男女平等」を学校で教える小中学校用の教科書があること知り、日本語訳を読んで感想を書く。ノルウェーは、UNDP (国連開発計画)の発表するHDI (人間開発指数)とGEM (ジェンダーエンパワーメント指数)がともに世界第1位である。この授業の前に2つの指数の上位50カ国を見せ、日本の現状を知らせる。(HDIは9位、GEMは32位 2002年)なぜだ、と疑問が湧いたときにこのテキストを見せると生徒は驚く。ジェンダーを学んでも「世の中は変わらない」「今の状態がよいから続いている」と考える生徒は多い。しかし、このノルウェーの教科書を見ると、教育・意識の力でと社会は変えられる、と気づき、勇気が出る。また、小学校1年生用の教科書の中に「男の子と女の子のちがいはなあに」

「同じはなあに」というなぞなどがある。同じが多い、と気づくことがこの授業だけでなく、共生と平和のねらいである。世界の中のジェンダーを探る機会はモンゴルについて2回目である。いずれも日本とは社会が異なり、存在するジェンダーは相違点がある。しかし、共通点の方が多い。

(2)準備するもの

◎ノルウェーの「男女平等の本」(『ノルウェー「男女平等の本」を出版する会』翻訳・発行)全6冊※を7セット

- ※1 (小学校1年生用) 家族みんなで協力
- 2 (小学校2年生用) 多様な家族学校で
- 3 (小学校3年生用) 私たちの町の昔と今
- 4 (小学校上級用) このように歴史は始まった
- 5 (小学校上級用) 魔女狩りから参政権まで
- 6 (中学生用) 第三世界の女性たち

◎感想を書くシート

◎UNDP発表のGEM・HDI上位50カ国の表

(3)展開

- ①UNDP発表のGEM・HDI上位50カ国の表を配布し、日本の位置を知る。
- ②HDI値が上位にもかかわらず、GEM値が一部の途上国より低い理由をこれまでの学習から考える。
- ③2つの値とも上位には北欧が、特にノルウェーは世界第1位であることに気づき、理由を考える。
- ④ノルウェーの小中学校向け教科書「男女平等の本」に出てくるなぞなぞをする。
- ⑤ノルウェーの小中学校向け教科書「男女平等の本」の日本語訳を知り、6冊のうち興味のあるテーマの本1冊読む。
- ⑥感想を書く。

(4)生徒の反応 (感想から)

●男女平等化が進んでいると言われているノルウェーの学校の教科書を使って世界の男女観を調べた。ノルウェーではジェンダーの授業を小学校のころから受けていて、男女差別の歴史や世界の男女観を学習するそうだ。魔女狩りや各地の部族の儀礼の話ものっていて、そういうものもジェンダーにつながるのか、とびっくりした。ノルウェーでは現在とても男女平等が進んでいますが、もともと男女平等精神が根付いていたわけではなく、法律や制度の改革で、政府が中心となって国民の意識を変えていったそうです。それを聞いて私は「なぜ、日本にはできないのか」と思いました。

たぶん日本でも、結婚改名や育児休暇を見直すことで、少しずつでも男女に関する固定観を変えていけると思います。

●「男の子と女の子のちがい」と「男の子と女の子のちがい」のなぞなぞをしました。

- 同じところ：人を好きになる
 - ・母親から生まれる
 - ・必ず死ぬ

などいろいろな意見をみんなで出しました。この授業では楽しく男と女の違いなどについて学ぶことができました。

●『(中学生用) 第三世界の女性たち』を読んで一とある国の地方では成人になるために、性器を傷つけるということをするようです。これにはとても心が痛みました。人の一番敏感なところをキズつけるわけだから。精神的にも肉体的にも辛いと思いました。しかし、その地方の人にとってそれが普通なことだそうで、みんなちゃんと受け入れるということです。どこにでもある性差だけど、少しずつでもなくなっていけばいいなあと思いました。

7. まとめの授業展開例

1) 合同授業展開例 第14・15回授業

「共生と平和の鎖」—【3グループ合同ワーク】—

(1)ねらいと留意点

本講座のまとめとして、2時間かけて3つの軸を結びつけ、共生と平和の必要性と可能性を考える。まず、1時間目は3グループそれぞれの学びの中から、別々に共生と平和を阻害する要因を見つけていく。そして、1つにつなげていくことによって互に関連していることに気づく。講座の集大成である。2時間目には、共生と平和を阻害する連鎖を断ち切るために、自分たちがしていくこと3グループ合同で話し合う。現実の社会が抱える大きな問題なので、自分たちができることに無力感を感じる生徒がいることは予想される。急激な社会の変化を生徒の話し合いに求めるのではなく、自分たち(高校生、市井の人間)が今できること、これからしていけること、に分けて具体的に考えさせるとよい。

(2)準備するもの

- ◎各グループから2～3人、合同で6～7人になるように班編成をしておく。中間報告会の班と同じである必要はない
- ◎各班に模造紙1枚、粘着剤つきカード20枚を色違いで2組、マーカー黒6本、8色セット1組。配布しやすいように班ごとにまとめておくとよい。



(3)展開

〔1時間目〕

- ①これまで学習してきたことを思い出して、共生と平和を阻害しているものを、1事例1枚ずつカードに書き出す。(阻害カード)
- ②班の中で書いたカードを見せ合い、関係し合う阻害カードをつなげて模造紙に貼り付け、鎖状にする。
- ③阻害カードとつくった連鎖を班ごとに発表する。(各班5分以内)

〔2時間目〕

- ④阻害の鎖を断ち切る方法を考えて、事例ごとに具体的カードに書く。(共生カード)
- ⑤共生カードを模造紙の鎖に貼っていく。
- ⑥つくった表を発表し、共生と平和を阻害する連鎖を断ち切るために、自分たちがしていくことを互いに確認し、学び合う。

(4)生徒の感想(研究収録原稿から)

●他のグループと討論しあうことによって、それぞれの問題が絡み合い、複雑な問題になっていることもわかりました。すべての問題は解決していくことが相当難しい問題ばかりですが、一人一人がこのような事実を知り、少しでも考えることによって、解決に近づくのでは。そして解決しなければならないと思いました。

●私たちは先進国である日本で「与えられること」に慣れきっています。私は新教科で学んだ現実の状況から、受け身ではだめだと思いました。今、私たちは新たなことを吸収すべく自分から動き出す積極性が必要です。正しい知識は相互理解へとつながり平和な共生を生み出すのではないのでしょうか。「当たり前」と簡単に済ますのではなく、常に疑い自分で考える姿勢が大切だとわかりました。

●今回の授業で私たちはこれから全てのことにおいて、あふれる情報をちょっと立ち止まって自分自身で冷静に振り返る必要性を感じた。何かをある1つの方向から見ると、人間の多くは物事を部分的にしか考えることができず、偏った意見を持ちがちだ。

しかし、私たちは物事をもっと総合的に考えなければならない。そしてそれが互いを認め合うということになり、平和に繋がるのではないかと思う。

そして真実を知るためには、もう1度事実を自分自身で検証してみることも大切だ。そうすることで、誤解などをすることもなく、物事を深く考えることができると思う。



8. 2年目の成果と課題

初年度は3人の教員が自分の担当するテーマについて、授業を組み立て、準備、実践するのに精一杯だった。2年目は他のテーマは何を学んでいるのかということに気にするだけのゆとりができた。そこで学びの段階を合わせていこうと授業の流れを「導入→展開①→展開②→まとめ」と決めた。これは成果である。3グループ合同授業で「共生と平和」への気づきを確認しながら、進めることができた。しかし、新たな課題が出てきた。2グループ合同授業の内容選択と、どの段階で行うかを決めることである。それぞれの担当教員の思惑やゲストの都合を考慮しながら、2グループだからこそ出来ること、必要な内容、タイミングを検討していかなければならない。高校生が授業の中で共生と平和の原理を導くことは困難である。しかし、必要性和可能性を探ることは十分出来ると手応えを感じている。今後さらに科学的なプログラムを組んで、よりよい授業を構築していきたい。

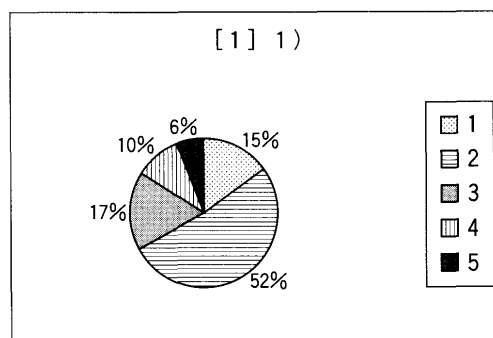
共生と平和の科学に関するアンケート調査

3/16/2003 実施 回答数 108人

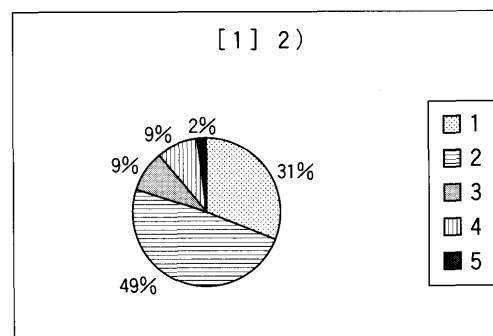
[1] 共生と平和の授業を受けてきた現時点での自分の考えを1～5で答えてください。

- 1：とてもそう思う
- 2：そう思う
- 3：どちらでもない
- 4：あまりそう思わない
- 5：そう思わない

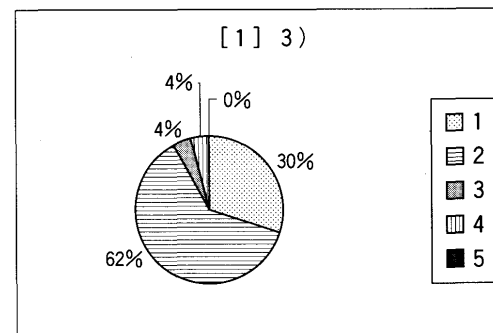
1) 1つの授業に複数の教員が関わることにより、様々な視点からの知識が得られると思う。



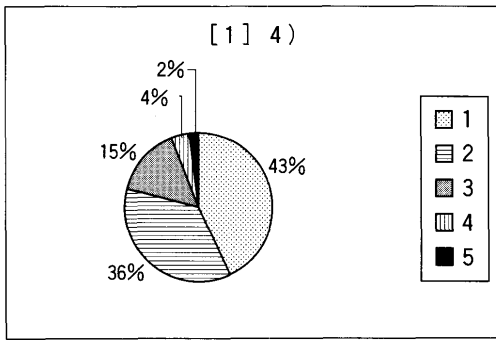
2) 学校外の先生の授業では経験的、専門的な知識が得られると思う。



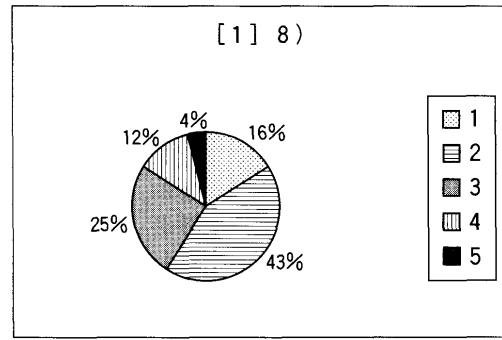
3) 様々な問題が入り組んだ現代的な社会問題に関する知識が得られると思う。



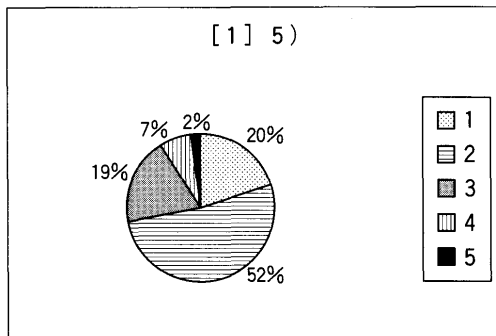
4) 「共生と平和の科学」で扱ったような“答のにくい問題”について学習することは大切である。



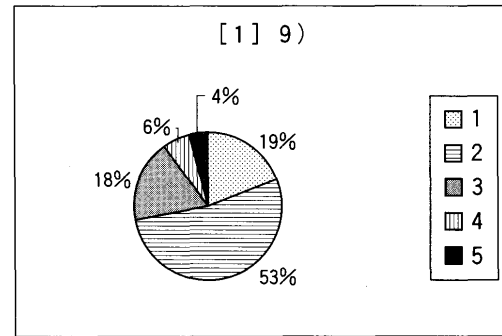
8) 1つの課題について深く分析したり、幅広く考えてまとめたりする力を持つと思う。



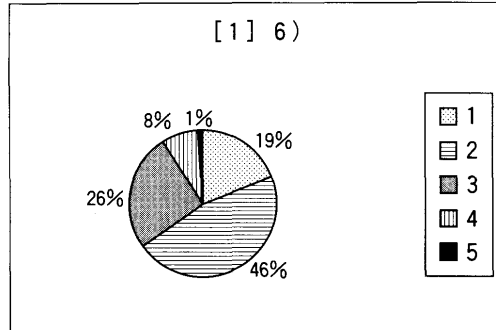
5) 「共生と平和の科学」で学習したような問題に対して自分の意見や、考えを持つようにしている。



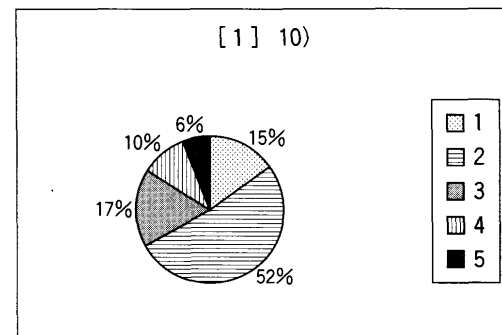
9) 「共生と平和の科学」の授業を通して、自分の教養を深く広くすることができると思う。



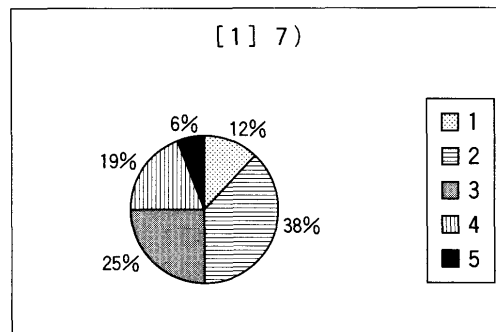
6) 「共生と平和の科学」で学習したような知識を活用して自分の意見を組み立て、自分なりの考えを持つようにしている。



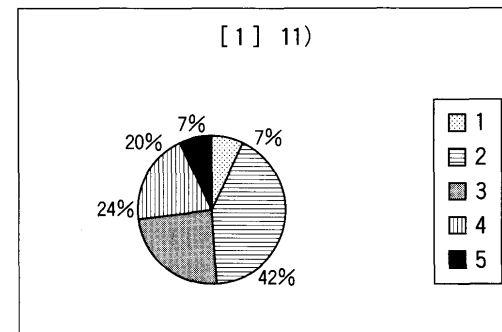
10) 「共生と平和の科学」の学習がこれからの自分の進路選択や自分の生き方の助けとなると思う。



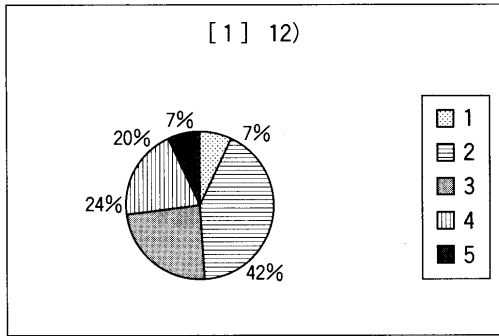
7) 1つの大きなテーマを3つのグループの視点から多角的に考えることができると思う。



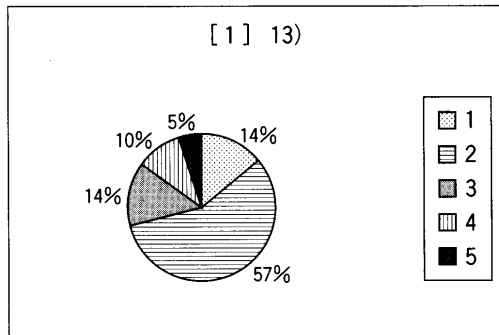
11) 「共生と平和の科学」で学んだことを現実の生活や社会で応用し役立てようと思う。



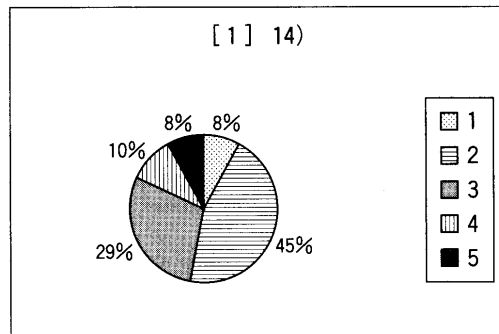
12) 「共生と平和の科学」で学んだことをこれから自分が直面する問題や社会問題を考える際に活用していこうと思う。



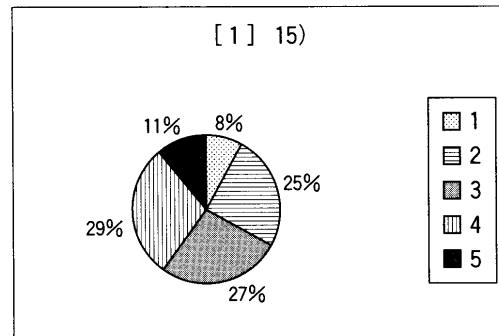
13) 「共生と平和の科学」で学習した内容について自分の問題意識が高くなると思う。



14) 「共生と平和の科学」の学習では知識のみでなく、体感することができ関連する事柄への関心が高くなると思う。

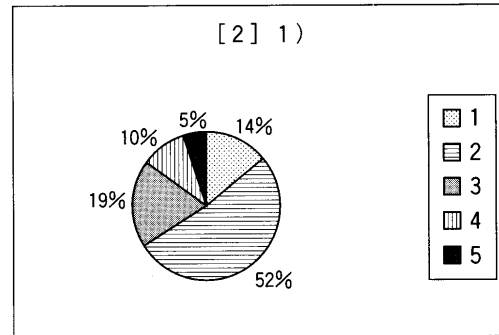


15) 「共生と平和の科学」で学習した内容に関連する既存の教科学習の内容についても深く学ぶようになると思う。

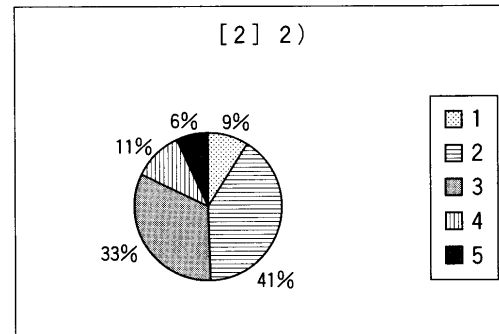


[2] 「共生と平和の科学」という教科についての次の質問に1～5で教えてください。

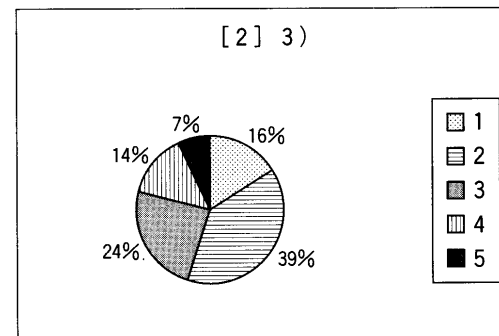
1) 少人数で学習したために疑似体験など多様な学習活動ができると思う。



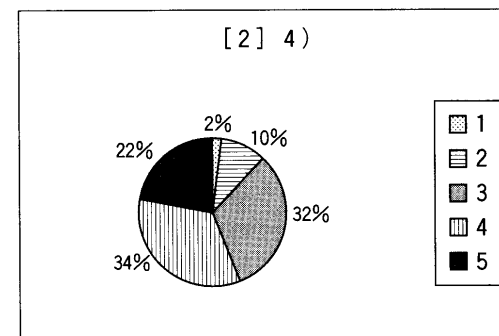
2) 「共生と平和の科学」の学習を通して、学び方の多様性が身に付けられると思う。



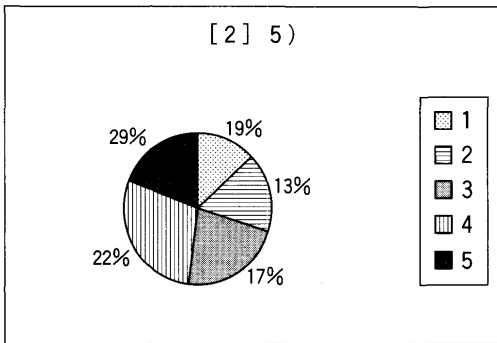
3) 3つのグループの中から選べることが意欲的に取り組むことにつながると思う。



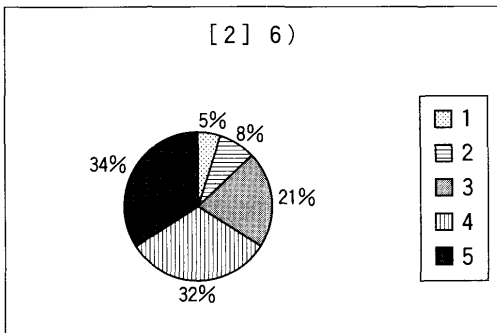
4) 「共生と平和の科学」で1つのテーマを詳しく学んだことが、既存の関連する教科(例、英語国語等)を意欲的に取り組むことにつながると思う。



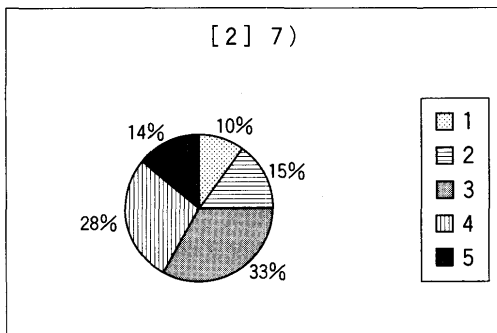
5) 「共生と平和の科学」で学習することにより、他教科の学習時間が減って、他教科の学力が低下したと思う。



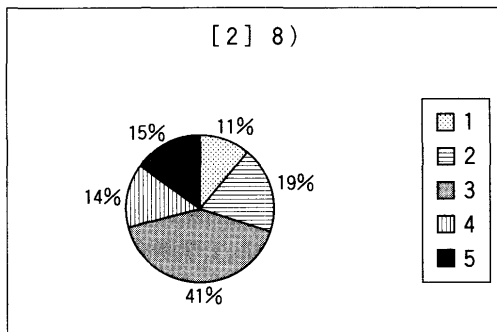
6) 「共生と平和の科学」は週1時間では時間が足りないので時間数を増やして欲しいと思う。



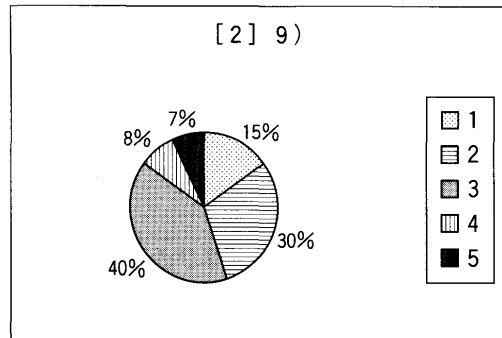
7) 「共生と平和の科学」を週1時間学ぶより他教科の学習がしたいと思う。



8) 総合人間科より「共生と平和の科学」の方が、学習の目的がはっきりしていると思う。



9) 総合人間科の方が自分のペースで深く学習することができると思う。



10) 「共生と平和の科学」は、総合人間科以外の他教科より、友人や教員などとともに“人と学びあう”機会が多いと思う。

